

立教大学図書館蔵『月光花光草子』の紹介・翻刻

金^{キム}

有珍^{ユジン}

『花みつ月みつ』は御伽草子の稚児物・継子物に分類されている作品である。稚児花みつの身代わりの死が描かれる事から、古くより文覚発心譚との類似性が指摘されており、近年では『源海上人因縁』と同様な内容を持つ事が注目されている。本作品の伝本は、以下の五つが知られている。¹⁾

- ① 京都大学文学部国語学国文学研究室蔵『花みつ』奈良絵本・横二冊(京大本)²⁾
- ② 静嘉堂文庫蔵『花みつ月みつ』写本・大一冊(静嘉堂本³⁾)
- ③ 静嘉堂文庫蔵『花みつ月みつ』写本・大一冊のうち(「道明のさうし」と合冊)(静嘉堂本⁴⁾)
- ④ 高山郷土館蔵『月みつ花みつ』写本・一冊(高山本)⁵⁾
- ⑤ 武田祐吉旧蔵『花みつ』奈良絵本・横二冊(武田本)⁶⁾

本稿で新たに紹介する立教大学図書館蔵『月光花光草子』は、江戸川乱歩の旧蔵であり、箱入り二一点のうちの一点であったようであるが(立教大学図書館 OPAO)、現在は個別の帙入りとなっている。請求記号 ZDC913.49/G32、写本一冊、江戸前期写、袋綴、縦二七糎、横一九・三糎。表紙は原装で橙色であるが、焦茶色の繊維が全体的に薄く付着している。外題は鉛筆の左肩打付書「月光花光草子」(題簽の跡あり)。料紙は楮紙、墨付二八丁、前に遊紙一丁。本文は一〇行、字高は二一・四糎。内題・奥書はなく、印記「立教大學圖書」とある。少々虫損があり、四つ目綴じの真ん中で糸が切れている。

帙には、江戸川乱歩が書いたと思われる原稿用紙一枚が入っている。その説明には、「徳川初期写本か 此書解題を失へども、弘文荘は白木古書展出陳の際「月光花光草子」と名づけた。昭和二十四年十一月の古書展なり。千八百円に

て購入す」とあり、購入時の事情がうかがえる。鉛筆の外題は乱歩が購入後に書き入れたものか。乱歩は男色研究で知られる岩田準一と懇意の仲で、その研究にも様々に関わっており、稚児物とされる本書の収集もそのような活動の一環と見られる。

『花みつ月みつ』の諸本に内容の違いはあまり見られないが、その叙述は類似性を保ちながらも、伝本ごとに趣が異なる。諸本を比較検討した菅原領子氏、大地美紀子氏によれば、諸本は場面によって関係の親疎が異なっており、系統を立てる事は難しいとされている。諸本同士の関係については、取り上げた場面やその数によって意見の相違も見られるものの、両氏ともに、②静嘉堂本1・③静嘉堂本2・④高山本の三本は類似する箇所が多く、近しい関係にあるとしている。

立教大本もまた、これらの三本と類似する箇所を多く持つており、冒頭から約三分の一、花みつの母が亡くなる前までは、②静嘉堂本1・③静嘉堂本2と類似する箇所が多く、それ以降は、②静嘉堂本1・④高山本と類似する箇所が多い。②静嘉堂本1は比較的叙述が簡潔である一方、③静嘉堂本2と④高山本は叙述が長く、独自の記述も少なくないが、立教大本は場面によって、これらの二本と②静嘉堂本1との間に位置するような本文を持っており、その変化の過程の一端を示している。全体としては静嘉堂本1にもっとも近似して

いると見受けられる。ただし、近似する三本との類似箇所は、場面によって文章単位で複雑に入り込んでおり、三本の内どの本にもっとも近いかは、内容や表現のどちらかを基準にするかによって、判断が分かれる場合もある。

以下、立教大本の翻刻を載せる事とする。貴重な資料の撮影・翻刻を許可してくださった立教大学図書館に深謝申し上げます。

立教大学図書館蔵『月光花光草子』

【凡例】

- ・旧字・異体字は常用漢字に改めた。
- ・行取りは底本のままにしたが、一部、段組の都合上、改行になった箇所がある。底本にはこのような改行はない。
- ・読解の便を図り、「　」、「　」、句読点を付した。
- ・虫損の場合は、校合等により判読し「　」に入れた。
- ・執筆者の注記は（　）に入れ、振り仮名として記した。

【翻刻】

あかまつの、めうせんりつしのうちに、をかへと
いふものあり。しんさのものと申ながら、きりやう、

こつから、さいかくも、人にすぐれたるによつて、はりまのくに、にし八くにの、しゆごたいをもつて、そのいゑふつき申にをよはず。それにつけても、こを一人もち給はぬことをかなしめ、あるとき、をかへこゝろにおもふやう、わか身さかりなん程こそ、しうのおほえ、いみしくありといふとも、としをひゆかん身のはては、一ちやうこつしきのもといなり。よろつわか身の行衛のことをおもふに、このなきことをかなしみて、むかしも申こといふことのあれは、申こそせはやとおもひたち、あるとき、ねうはうはほつけしにまうてつゝ、をかへ、しよしやへさんろうしきせい申に、七日にまんす

「1オ

「1ウ

なくねうはうくわいにんして、さういなくなんしをそまうける。ちゝはゝ、ゆくすゑのことをもおもはず、よろこふ事かきりなし。夢にまかせて、名をは花みつとのとそ申ける。はるすきなつたけ、やうく花みつおとなしくなりけるに、あかまつ殿、をかへをめされければ、むまをはやめてまいりける。あかまつとの、をかへをちかつけて、「われくゝに三ねん三月の大はんをおほせいたさるれとも、それかしはのほるまし。しよせん、こふんのほりて、それかしのみやうしをなのり、くしをつとめよ」とありしかは、をかへ、こゝろにおもふやう、しうのみやうしをゆるさるゝこと、ときにとつてのめんほくなりとおもひつゝ、いそぎやうへのほりければ、「我、さいきやうのあいた、花みつをわひしめたまひて、おとなしくなして見せたまへ」と、なこりをしけにいひをきて、いそぎやうへそのほりける。はんうけとり、すてに日かすををくりゆくまゝに、つまなくしてはかなふまし、くによりねうはうをよひのほせんも、わつらひなり。いろこのみなどは、しうのきこえもしかるへからすとて、こゝろよせのかつらを一人ちかつけて、かくとかたりければ、

「2オ

「2ウ

かい／＼しくゆうなるねうはうを一人つれて
きたる。よく／＼見たまへは、見め、かたち、すくれ

たりければ、おつとのこゝろは、まかきのきくには

あらねども、うつろひやすきならひにて、此ねう

はうにあひくし、ひよくれんりのちきりにや

ありけん、程なくなんしをそ一人まうけたる。

おりしも九月十三夜なれば、そのよの月に

なそらへて、その名を月みつとぞ申ける。す

てに大はんはすきぬれば、月みつかは、あひ

くして、はりまのくに、そくたりける。はし

めてい糸をつくりて、あたらしのとぞ申ける。

花みつとの、は、にもをとらすもてなし、月日

を、くるほどに、花みつ十さい月みつ九つと申

に、をかへ、こゝろにおもふやう、かれらきやうたい、か

く

てをきてはかなふまし。いつれの山てらへも

のほせはやとおもひて、いつくかあらんとあんし

て、しよせん、しよしやへのほせはやとおもひ

て、しよしやをけんふつといひて、かのはなみつ

をくしてのほられける。へつたうのはうへを

とつれて、かの花みつをへつたうこうならば、

そのまゝをかんとそおもひて、のほられける。さる

「3オ

「3ウ

ほどに、けんふつしめくりて、へつたうのはうへ

さけなどをくりて、まいるへきよしをいひける

あいた、へつたうさしきをかさり、いろ／＼を

とゝのへてまちいたり。をかへはへつたうちかく

なりぬれば、は、すゑよりむまをおり、花みつ

をこしにのせて、ゑんまでこしをかきいれ

たり。あやしくおもひて見れば、としのほと

十さいはかりなるおさあひ人、いろ／＼のこそて

きて、せいかうの大きく、なやかにきなし、うす

けしやうに、まことにゆうなるていにて、きやく

てんにいりたまふ。へつたううちみて、せうしん

の御いりなりとて、はうちうのちこたちを、

とりあへぬていにていたしけり。さしきの

てい、一はうはへつたう、一はうはをかへかちこたち、

さうにあなかれて、さしきのふせい、まことに

ゆうなるふせひなり。しゆえん三へんすき

ぬれば、せうしんをはしめとして、らつふにも

なる。やう／＼さけもなかなはなれば、へつたう

すてにめいていして、しきりにさけをし

ければ、をかへ、こゝろにおもふやう、花みつをこは、

をかんとおもひつるに、へつたうこはぬよとおもひ

「4オ

「4ウ

して、いまはせんあくかなはぬよしをいひけるに、「5才をかへかいひけるは、「いまひとつきこしめされ候へ。なにことにても候へ、御しよまうをはかなへ申さん」と

いひければ、へつたう、このこと葉にこゝろよはくやなりけん、「そのきならはたまはらん」と申さるれば、「しさいにをよはず。たとひしよのせよりやうにてもおしみ申まし。たちかたなにても、御しよまうならはまいらせん」とぞ申ける。へつ

たうきけんよし。「しよりやうもほしからず。

まして御ちうたいも、おもひもより候はず。これにおはしますせうしんは、いつくのてらへも、さためて御ぬしつき候はんつれとも、しはしかほと也とも、これにへつたうこうけん申さん」とあり

ければ、をかへ申けるは、「てらなとへのほせ候はんするきは候はず候。せひもなき糸せものにて、ちゝは、たにもしつめかねたる、ふようのものにて候」と申ければ、「御ふようをはしつめ申へきことなり。御へんかへあるへからず」と、かへすく申されければ、「しさいにをよはず」と申とき、へつたうよろこひて、三どつ、けてのみたまひぬ。そのゝち、「なんちはこれにとゝまれ」とて、

「6才

こわかたう一人つけてかへれば、へつたう、そののち、をかへかかたへ申くたされけるは、「山てらなどは、わかとのはらの御とゝまり、夢くあるへからず。わらはをたまはり候へ」と申されければ、やかてわらはをのほせけり。あるとき、をかへ、おもひけるやうは、月みつかは、いかにうらやましくおもふらんとて、おなしくおとゝの月つみをものほせければ、人く、「しよしやのへつたうこそ、おひのくはほうとて、しゆこ

たいのきむたちきやうたい、あつかりける」とて、

うらやまぬ人はなかりけり。このちこたち、さかりになれば、いなか人のきんたちとも見えす。すかた、ようきにいたるまで、ようかんひれいなりければ、くはんをん、せいし、もんしゆ、ふけんのけんけかとも見えし。されは、なきけいふふかゝりける一さんのほうし、こゝろをかよはずといふことなし。しよしやは三百ほう、しゆとのかすは、をよそ、せん人はかりもあるらんとおもふ人く、これおとゝひに、こゝろをかよはさぬほうくはなかりけり。さるほどに、花みつ殿、ほんたいにてあるうへは、いろくこのそてどもを、かすをつくしてのほせければ、しよしやの

「7才

一さんの人くも、さすがに花みつとのとそ申ける。されは、月みつ殿、おなしきやうたいと申なから、うらやましくおもひけるところに、ういむしやうのならひとて、花みつとのつづは、むしやうの風にさそはれて、ついにむなしくなりた

まひぬ。もとより、むねをならへたることなれば、たれ

かはあらそふへき。四十九日すぎぬれば、やかてほんのかたへうつさせたまひければ、ふるいけんそく、さまくのたからものにあきみちて、なにごとにつけても、ともしきことなし。かゝり

「7ウ

けるほどに、なにごとやらん、宮にもものさはかしきことありとて、をかへとの、あかまつ殿御ともにて、さいきやうの日かすつもりけり。さる程に、きのふけふとおもへとも、程なく月日たちゆけは、なかくのるすににける。まことならぬおやのならひのかなしきは、花みつ殿いかに、といふことなくてそすきける。あるとき、をかへ殿おもはれけるは、むさんや、花みつはは、もなく、われさへかやうに、はるくさいきやうして、さこそたよりなくおもふらめと、おもひいたして、ねうはうかたへのふみに、「花みつかたへこそてつかはせ」といふときも、あさましけなるうすそめ

「8オ

ものをつかはしける。我この月みつとの、かたへは、いろくのこそて、かすをそろへて、これははうすの御かたへ、これはこしのはうすへとて、おりくにとつれければ、はうすをはしめとして、月みつ殿とそしやうくはんしける。かゝる程に、よにしたかふならひ、さかんなる花みつも、たのもしきかたなければ、きのふをとつれし人も、けふはけふは花みつ殿といふひともし。とをさかる程に、これにつけても、いさましきこゝろもひきかへて、よのなかあちきなく、なくさむかたなし。いと、は、御せんおもかけ、わするゝひまなく、月日をおくりけるに、あるとき、をかへ殿、きやうよりくたりたまひて、「おさなきものどもはいかに」ととひたまへは、ねうはう申けるは、「この程、しよしやのはうすの御かたより、申くたさるゝしさいあり。『花みつとのをふけうする」と申せ』とおほせられし」といひければ、をかへ、こゝろにおもふやう、あはれや、まことならぬおやなれば、さんそうするとおもへとも、又ねうはうのこゝろをもやふらし。または、はうすも、かくもんなとも、こゝろにいれぬほどに、こらさんためにやのたまふらん、とおもひて、

「9オ

まつ、てらへ人をのほせていはれけるは、「月
みつ、ひさしく見すしてゆかしき、とくくたり
たまへ。花みつは、まつおもふしさいあり。こなたより、
むかひをやらんとき、くたるへし」とか、れければ、「9ウ
花みつ見たまひて、「御ふみの、あそはしやう
こそふしんなれ。ひころはみつからにこそ、ふみ
をもたまはりしに、いまさら、花みつをはめさ
れさるらん」といひければ、月みつかわさには
あらねども、めんほくなしとやおもはれけん、
「身つからをまつめさるゝは、さためてはゝにて
候物かとかにて候」とて、なみたをなかしければ、
花みつ殿、月みつ殿にむかひての給ひけるは、
「そなたをこそは、ふかくもたのみ候へ。たとひ、いか
やうのきよいにち〔か〕ひ候ども、御身よく申」10オ
されは、などか御ゆるされなかるへき。くたりた
まへは、こゝろあきそ」とて、うちなみたくみた
まへは、おもてを人に見えしとて、さしもみ
たれぬくろかみを、そてにてをしなつるやう
にまきらかして、わかへやにいりたまふけし
き、まことにあはれなり。月みつ、さまゝ
こゝろもとなくおもひをかれけれども、なくゝ
さとへくたられける。をかへ殿、月みつ殿を御らん

して、はやくもせいしんしたりけるよ。花みつ
も、かくこそおとなしくなりたるらめとおもひ
て、なみたをなかし、われなから、あらひかことや
くさのかけにても、はゝかゆうれい、さこそわれを
うらみぬらん。なにしにとかをもしらすして、
かんだうするらんとおもひなから、月みつ
れて、しよしやへのほる。へつたう、いてあひたい
めんし、おなしやうなるちこたちを、さしきへ
いたされけれども、花みつ殿はいてられす。あ
まりにへつたう、めんほくなしとやおもはれ
けん、花みつ殿のへやにゆき、のたまふは、「御ふん
をは申ゆるしてまいらすへし。こゝろやすく
おほしめせ」と、やうゝになくさめて、へつ
たう、さしきへいてたまふ。花みつ殿〔は〕ひとま
とところに、たゝ一人おもひつゝけて、なくより
ほかのことそなき。又、おかへかこゝろには、たゝいま
いそぎのほるも、なにゆへそ。花みかつこひしく
てこそほりつれ。あはれ、へつたうのゆるす
とあれかし。花みつよひいたし、おもふことなく
さけのみてかへらん。さるにても、いかなることあり
て、かれをふけうするとはのたまふらんと、へつた
うのこゝろもはかりかたくて、心のうちにちうに^(マヤ)
「11ウ

あんして、なにともしひたまはず。へつたうも

こゝろのうちには、このことをいはゞとは

おもへとも、をかへかこゝろをとりにかへて、さう

なくいひもいたさゞりけり。又をかへ、かゑして心

おもひけるは、むさんや、このものは、まことにはう

すのきにちかいたりけるよと、さかもりにこゝろも

いらす、とかくこゝろにかゝりけり。はうすのき

にちかひたらんには、このさしきにていひて

もきよくもなし。わかかへりてこそ、なをも

くはしくとはめとおもひて、さしきをたちて

かへりけり。花みつ殿、さすかにちゝのこひ

しさに、はたいたのかけについで、かへる

さを見るに、をかへ殿も、花みつをみすしてかへ

ることよと、なみたをなかし、このものやみると、はた

いたのすきより、めとゞみあはせて、をかへ、これは

花みつやおもひけれとも、そこにてよひいたす

へきにもあらず、なくくかへられける。はな

みつ殿、しはしはちゝを見をくり、なみたを

なかしつゝ、わかへやにかへり、こゝろにおもふ

やう、我はちゝのふけうをかうむりたるに、あまつ

さへ、はうすにもにくまれり。それをいかにと申

に、はうすのきにちかはすは、なかは申なをし

「12才

てたまはらさらん。おやにもしにもはなされて、

うきよにありても、かひあらしとおもひけ

れは、めしつかひけるわらはをかつけて、「いかに

まつわう、大ふ殿、しゝう殿とくゞいらせたまへ。

ひとりなかめ候へは、花ひえたるこよひの月

も、ひかりすくなく候へは、こよひのめい月に、しや

さんつかまつり、もろともになかめ、うきよのあ

ちきなさをもわすれ候はん」とのたまへは、まつわう」13才

うけたまはりて、いそぎ二人のかたへゆき、「花

みつ殿御つかひにて候。御ひま候はゞ、御いり候へ」

と申。「なにことやらん」ときくに、「御しやさんのた

め」と申ければ、「やかてまいり候はん」とて、やいんの

ことなれば、したしめひしゝとするまゝに、

(ママ)さきさしにうちかたな、ちやうけんねり

大きくのそはとりて、五てうのけさうち

かけ、おもひくゝのなきなもつて、二人の人くゝ

まいりければ、花みつ殿、「めい月にて候へは、しやさん

申、月を見候はん」とおほせられければ、「さらは」13才

御とも申さん」とて、しゝうはさきに、大ふはあとに

ゆきけるに、花みつ殿、わらはをかつけて、

「をのれはとゞまり、るすせよ」とありしかは、まつわう、

へやにかへりければ、三人つれてしやさん

しけるあいた、すてにによりんたうにまうて

つゝ、しとみのもとをり「と」つて、のけなるとこひきよせしくまゝに、ねんしゆしてはんへるに、

やうくめい月、にしにめぐりければ、さんけいする

人もなし。はんの人くも、はやねしつまるとお

ほしきしふん、花みつ殿なみたをなかし、そて

のつゆに、月のうつるはかりに見えしかは、二人の

はうしあきれて、なにとてかほとまてはとあや

しめて、「さりとも、われら一人には御つゝ、み候はし

とこそそんし候へは、御こゝろをのこさることにや

いかにぞ」と申ければ、しはらくありて、なみたを

をさへておほせけるは、「うきよのならひ、いまさ

らおとろふきにはあらねとも、我はこゝよにお

はせしときは、はうすをはしめとして、しよにん

そうきやうせられしに、いまはよになきものに

なりはてゝ、おやにもしにもにくまれり。され

とも、めんく二人はかりにこそ、はなされ申さ

て候へは、のちのよまでも、わすれかたくこそ

候へ」とて、なみたをはらくとなかしたまへは、

二人のものとも、なみたをたかひになかすところ

に、花みつ殿、「めんくに申たきこと候へとも、御こゝろ

のうちをはかりいり候。又、たのまれたまはんこ

「14オ

「14ウ

ともかたしと、このあいたためらひて、申いたし

候はぬ」とおほせられければ、この人く、「なにこ

にても候へ、うけたまはり候。むねをはそむき

申まし。いつはりとおほしめし候まし」とて、きん

ちやうをすれば、「まことにそのきならば申候はん。

せんするところは、へちきにても候はず。おとゝ

にて候ものを、うちてたまはり候はんや。ひた

すらめんくをたのみたてまつる」とありしかは、二人

のほうし、さうなくへんしにをよはずして、

せきめんしてありしかは、二人のものにむかひて

のたまひけるは、「よもきこしめさしとはおもひつ

れとも、御きんちやうのうへは、いかてかうたかひ申

へきとそんし候て、申はんへりつれとも、御心かはり

なればちからなし。このこと、おとゝにて候ものきゝ候は、

はうすの御みゝにもいるへし。さあらんとつて

は、さとにかくれあるへからす。そのうへ、うきよに

ありてもせんなし」と、けにくしくのたまへは、この

人く、こゝろのほかこそおもひける。花みつ殿、二人

にむかひてのたまふやう、「このよもすてにふけ

ぬらん。はやく御かへり候へ。御なこりはさまく

つきせねとも、かくてあるへきにはんへらす。をし

「15ウ

まれぬいのちなからもすてかねて、いつくの

さとのゝすゑ、山のおくにもなからへてあるときこしめすならば、たかひに見もし、見候(ママ)系たてまつらん。」

16オ

又このよ、あたるくさはの露ときえぬると、つたへきこしめされても候は、こしやうのことはたのみたて

まつらん」とありしかは、二人の人くおもふやう、この

ときかすは、さためていかなるせゝのいはまにも、

御身をしつめたまひなん。ひにいろも、こうみつに

いろもこうなれば、われく二人、せんくのしゆく

しうにてこそあるらめと、おもふこゝろをさきと

して、かゝる人と申うけたまはるもふしやうな

れば、よしくのたのまれたてまつらん。又、花みつ殿

をうしなひて、月みつ殿をみてかひもなし

16ウ

と、こゝろにおもひかへして、二人の人くめとく

きつと見あはせて、「いさく、たのまれたてまつ

らん。しさいにをよはす。うちてまいらせん」と申

せは、花みつ殿なみたをなかし、「さこそふとく

しんおほしめし候はん。御こゝろのうちも返々御

はつしく候へとも、よしく、それもちからな

し」とその給ひける。「さて、この人をいついか、たは

かりて、うちまいらせん」と申ければ、花みつ殿 又なみ

たをなかし、「われこそかやうにおもへとも、むさんや、

このもの、わらはかは、こ、よになきことをかなしみ、

17オ

みつからをなくさめんとて、わかやへきたり候也。

さためてこんやも、われも(マ)なくさめにきたるへし。

たとひをとつれ候とも、へんしをすへからす。い

つかたへもゆきつらんとおもひて、「か」へらんとこ

をうちたまへ」といひければ、「しさいにをよはす」と

りやうしやうしければ、又よをこめて、花みつ殿、

わかへやにかへりける。そのち、大ふ、しうは一し

よによりあひて、「あはれ、けにほうしの申うけ

たまはるましきものはちこなり。この花みつ殿に

申うけたまはらずは、あれほとかたちいつくしき

花のやうなるちこそ、てにかけていかてかうつ

へき。又、ち、は、の、なけきたまはんことのいたは

17ウ

しさよ。あはれやな、つゆけき花のあさかほの

いつまでと、はかなきいのちあるあしたの月みつ

との、きえゆかななりをのみかなしみて、月かけ

をたにもいとふよに、おもはぬかたにうきくもの、か

かるへしとはしらくもの、ひもゆふくれの山のは

に、いりあひのかねのつけつるを、むしやうとはのち

にこそおもひあはせけれ。さる程に、ひつしの

あゆみちかつけは、八月十六日のくるゝこと、せつなの

「18オ

ほどよりなをはやく、やくそくのしふんになりしかは、二人の人くよういして、なかくそくをはもたさりけり。十六日の月なれば、山のはにかゝりて、あしひきの、やまのあなたのさと人の、おしめる月のいてもせず。花みつ殿のへやはひかしにありけるに、やうく月のしろめいて、おりふし、としのほど十四五とおほしきちこ、いろへのこそで(トク)き、あしふくろふかくひつこみて、うらなしはきて、くれなぬのうすきぬひきかつき、うすけしやうして、たけなるかみをひきまはし、大きくのこしにはさみ、月をうしろになして、よしあるさまにてあゆまれけるふせひ、花みつ殿に露ほともとらず。こゝいまのかたちは、てんにんのやうかうも、これにはまさらしと見えし。このちこ、しつかにえんにあかり、しどみにたちそひて、やさしきこゑにて、「なふ、はなみつこ、なふ」と、二三とよはせたまひしかとも、へんしもなし。しはしたゝすみたまひしか、「さては、よそへ御いてありたるや」と、ひとりことしてかへりけるところを、大ふ、あまりのかなしさに、むすどたいでありしところを、しゝうかよりて、

「19オ

「18ウ

たけなるかみをてにまき、むねのあたりとひちのかゝりを二かたなさして、かつはとすててまつり、二人のものともへやにかへり、「あはれ、ものうきよのかなしさよ。ほうしの身にて、ちこをてにかけ、うつたることのかなしきよ」と、大いきついでいたりけるところに、やゝしはらくありて、「これはいかに」といふこゑをき、月みつ殿のころされぬるを見つけ、るよと、二人なから、いとあはれにきゝけるに、ひきかへて、「花」みつ殿をたゝいま、ものかころしまいらせたる」といへは、大ふ、しゝうこれをきゝて、むなさきして、「まさしくわれらは、月みつ殿をころしつるに、ひきかへて花みつ殿といへは、この月のよに、きやうたいを見まかひぬることの、いふかひなさよ(ヤマ)こそ、人くなげかんすらん」と、かなしみあへる。そのゝち、かとあらけなくたゝゝきければ、いとゝゝろもきえけるに、かとより、「たゝいま花みつ殿を人かころしたてまつり候」といふあいた、さて、あるましきものをおもひながら、ゆきてみれば、ひとまところにかきいれて、へつたう、かみをひさにかきのせて、「十きいと申せし其のころより、をかへ殿にこひ申、十六の

「20オ

いまにいたるまで、一日たにも、さともをかす

して、いまはは、もましまさねは、ほうしに

なしをき、こしやうをもとはれんどこそおもひ

しに、これはいかなる人のしわざにや。われを

すて、いつくへゆくぞ、いかなることぞ」とて、こゑを

もおします、なきかなしみたまへは、月みつ殿、

し、たるあにのをとりて、「なふ、花みつに又も」 20ウ

なききやうたいなれば、いつのよにか又あふ

へし」とて、もたへこかれたまへは、大ふ、し、う、こ

れを見て、いとけなきより、いとおしくおもひ

つるによりてこそ、わりなきをもりやうしやう

しつるに、おもはさるに、このちこにたはから

れ、わかてにかけて、ころしたるとおもへは、はう

せんとしてあきれるたるか、大ふ、し、う、めと

く見あはせて、さしきをたち、わかへやに

かへり、「このちこに、たはかられぬることのむねん

さよ。いきておもふもかなしきに、いさや、」 21オ

いそきおつつき、してのやま、さんつのかは

にてをひつき、花みつ殿の御ともせん」とて、

二人のものともおもひきりたり。大ふ申

やう、「たとひしかいをするとも、人く、にみれん

に見えたまふな、し、う殿」とて、ふたりつれて

へつたうのはうへゆき、「へつたうに申へ

きことの候。花みつとの、御かたきは、我く

二人にて候なり。それをいかにと申に、いまは

なにかかくしまいらせん。ゆふへ、花みつ殿、

我々二人をいさなひて、によりんたうに御つ

やし、よのなかのたまふやうに、なきことを

かたりたまふに、つゐてわれく二人をふかく

たのむへきよしありしかは、ほうしの身

にて、ちこにたのまれ申さしとは、いかてか申へき。

しさいあるましきよしを申ければ、『さらは、

我おと、の月みつをうちてくれよ』とありし

かは、はしめはやうくしさい申せとも、かなはず

して、月みつ殿とおもひてうち候へは、花みつ

殿にて御わたり候ほとに、いまはわれく

かいのちもおしからず。御とも申すへし」とて、二人

のものとも、さしちかへんとするところを、月

みつ殿、二人のなかへわりいりて、「めんく

御しかい候は、われも御とも申へし。三人とも

なききやうたいを一人さきたて、いのち

をおしむへきにはあらねとも、あにて候物、

これほどにはかりことをめくらし、御にて

」 21ウ

」 22オ

かゝり申ことは、こしやうをたのみ申へきゆへにてこそ候へ。御しかいも候は、花みつ殿のた、いまのこしやうのくるしみ、たれかたすけ候へき。しかるへくは、思しめしと、まり候へ」と、かなしみ

「22ウ

たまふところに、へつたうきたり。なみたをなかし、「この身こそ、さきのよのいんくわ、のかれかたくして、かやうにむなくもなるとも、めんく二人ましまさは、花みつ殿にそひたるとおもふへし」とて、ぬきたるかたなにとりつけは、一はうはらうそう、かたくはちこなりしかは、おもひなからしかいしそんし、おもひわつらふところに、はうくよりきたりて、「なき人のあとをば、しらてはとはぬならひぞ。いかなることぞ」とて、かたなをうはいとりければ、おもひながら「23オ
しかいしかね、むねんさ申はかりなし。かくてあるへきことならねは、さいこの御しやうそくきせたまつりけるに、さうの御てをにきりて、むねのもとにをきたまひける。あまりのかなしさに、あはれにおもひ、御てをひらきて見れば、あまたの文をそもたれける。一の文は「はうすの御かたへ」とあり。ひらきてみれば、

「ようせうのとしより、人となされ申十六のいまにいたるまで、御おんならずといふことなし。もつともこのりと、まり、こしやうをもとひ申さんこそ、しゆんきにて候へとも、こゝろならすききたち申こと、世々しやうくのをそれにて候へとも、かくなり候」とて、おくに一しゆのうたあり。

葉はちりてこすゑさひしくなりぬれば

しもうらめしきこゝこそすれ

ひさかたのあまきるくもになをとめて

ちる花みんとたれかいはまし

さかりなる月をそ人はなかめける

花はあたなるものとおもへは

「24オ

又、「大ふ殿、しゝう殿へ」とかく文には、「かやうに御てにかゝり申こと、まことに御こゝろさしふかきゆへなり」とて、

二あらはひとついのちをのこしをきて

きみかなさけをおもひしらまし

又、「月みつ殿へ」とかゝせたまふ文には、「かやうになり候へは、又もなききやうたいにて、さこそさひしくましますらんと、そののみこゝろにかゝり候なり」とて、これも一しゆ、

花のくもかせにちりなは月ひとり
のこらんあとそおもひをかるゝ

「 24ウ

又、さとへの文には、「はゝにて候ものにはなれしより、よろつはねなきとりのこゝちして、ものうく候しに、はうすの御きにちかい候のみならず、殿にさへはなされ申で、うきよにありかたく候ほとに、まつ、こゝろならずさきにたち申」とて、これも一しゆ、

おしまれぬ身は山かけのさくらはな
ちるともたれかあはれとはみん

「 25オ

とかゝれたり。さてこそさとへのうらみ、はうすのせんかたなきに、かくなりたるとは見えし。さて、このふみをこしのはうにもたせて、いそきさとへくたしける。をかへにこのよいひければ、をかへ、あまりのこのかなしきにや、「さてく、いかにく」とはかりいひて、あきれたり。やゝしはらくありて、「うたてのこや、ほんふの身とて、これを夢にもしらすりけることの、かなしきよ」とて、なけきの給ことかきりなし。「これにつけても、花みつかは、あらは、かゝるうらみことはよもあらし。くさのかけにても、うらめしくおもふらん」。いまさら、

「 25ウ

一かたならぬおもひに、ふししつみたまふこと、なかく申もをろかなり。さるほとに、こしのはう、「はやく御いとま申さん」とありしかは、「さらは、御へんし申へし」とて、へつたうのかたへの文のことはには、「花みつかことうけたまはり候。なけきのなかのかなしみ、よろつ御すいりやうあるへく候。いかさまやかてまかりのほり、かはれるすかたをなりとも、一と見候はん」とかきとゝめ、こしのはうにさしいたせは、文うけとりてかへりければ、をかへ殿、なくくかどをくりしけるか、こしのはうに、「たゝいまおもひつゝけて候」とて、一しゆ、

「 26オ

われこそはさきたつへきにさきたてゝ、
なきあととひてしほるそてかな
といひすてゝ、なくくうちへいらたまふ。こしのはうも、をかへ殿のありさまをみて、いとゝあはれにそおもひける。さるほとに、をかへ殿、なくくてらへそのほりける。花みつ殿かはれるすかたをかきをこし、かほとくそへて、「うたてのありさまや、はうすの御きにちかひたるよしをいひしほとに、いまはおさなき物なれば、ものをもそんし、かくもんなともこゝろにいれ

「 26ウ

ぬほとに、かやうにおほせらるゝとおもひければ、きやうよりくたりし日よりも、かた

ときわするゝひまもなかりしかとも、はうす

の御こゝろをはゝかり、又は、その身のゆくすゑ

までのこらしめのためとおもひ、かんたうす

るといひつるに、これほどのこゝろのあらん

するとは、夢ほともしらざりつるなり。さても

はゝかことをこそ、月日のたつにつけて、わすれ

すおもひつるに、らうたいのちゝをはなにとなれ

とて、いつくへゆくそ、花みつ」とて、てんにあふ

き、ちにふして、なけきたまふをみるに、いよゝ

見きゝし大しゆたち、たかきもいやしきも、

ころものそてをぬらさぬはなかりけり。さて、かく

てあるへきことならねは、花みつ殿とある山に

をくり、むなしきけふりとなしたてまつ

れは、月みつ殿、なくゝあにのこつをとり、

大ふ、しゝうひきつれて、ゆきかたしらすな

りにけり。へつたうも、うきよのすまあせん

なしとて、ある山かけにとちこもりたまふ。さる

ほとに、をかへどのも、さしもさかりなるゑいくわを

すて、花みつかしゝてのわかれ、月みつかいきての

わかれ、かたゝしのひかたくて、もとゆひきり

「 27ウ

「 27オ

とんせいし、ことものゆくゑすてかたきにて、

へつたうのすみたまひけるあんしつにとちこもり、

みねにのほり、つま木をひろひ、たにゝくたり

てあかをくみ、なんきやう、くきやうしつゝ、

おやこのあとをそとふらはれける。そのゝちつたへ

きけは、大ふ、しゝう、月みつ殿三人はひきくし、

かうやにのほり、花みつ殿こしやうほたいを、

こゝろひとつにして、とふらはれけるとそ、うけ

たまはりける。むかしならぬことなれば、あまり

にゝあはれとおほえ、あらゝかきとゝめ侍るなり。

御覽させたまはん人ゝは、ねんふつを御申

候て、この人ゝを御とふらひあるへく候也。

「 28ウ

注

1 松本隆信「増訂室町時代物語類現存簡明目録」奈良絵本国際研究會編『奈良絵本の世界』（三省堂、一九八二年）。

2 京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学蔵 むろまちものがたり』第二二卷（臨川書店、二〇〇三年）。（影印・翻刻）

3 横山重、松本隆信編『室町時代物語大成』一〇（角川書店、一九八二年）。（翻刻）

4 マイクロフィルム『物語文学書集成 静嘉堂文庫所蔵』第三編

- (説話物語・擬古物語・物語草子)三八(雄松堂フィルム出版、一九八三年)。(影印)
- 5 注三、前掲書。尾題「月みつ花みつのさうし」。(翻刻)
- 6 松本隆信編『室町時代物語大成』補遺二(角川書店、一九八八年)。(翻刻)
- 7 他に、内容のあらずじ、本物語が『月日の本地』とは別作品である事が記されている。
- 8 丹尾安典『男色の風景』(新潮社、二〇〇八年)、六六〜八八頁。注三、前掲書、菅原領子『花みつ』解題。
- 9 大地美紀子『御伽草子』『花みつ月みつ』の諸本について『早稲田大学大学院教育学研究紀要』別冊二〇号―二(二〇一三年三月)。
- 10